

# 人こそ宝たから

黒田清隆くろだ きよたか

日本で最初の内閣総理大臣は、現在の山口県出身の、伊藤博文です。では、その次の内閣総理大臣が、鹿児島の人だと知っていますか。

その名は、黒田清隆。鹿児島県の出身者として初めて内閣総理大臣に選ばれ、また、日本で最初の近代的な憲法を\*発布した人でもあります。

清隆が生まれたのは、江戸時代の一八四〇年（天保十一年）十月

【黒田清隆】



(国立国会図書館蔵)

## 【発布】

憲法ができたことを、国民に知らせること。

## 【棟割長屋】

一軒の建物を、壁で区切って数戸の借家にした建物。

十六日のことで、場所は鹿児島城下の新屋敷でした。

その後、幼くして母を亡くした清隆は、父と姉の三人家族で育ちましたが、その生活はとても貧しかったようです。住んでいる家は、壁の破れたところから隣のあかりがもれてくる、古ぼけた棟割長屋でした。その上、家のある場所は水はけが悪くて、部屋の中はいつもじめじめしています。十七歳の頃に父が亡くなり、さらに姉も他家に嫁いでいった後は、清隆は長屋に一人残されて暮らしました。

成長して薩摩藩の砲隊の砲手となった清隆は、ある日、大砲の試し射ちをする「火通し」という行事に参加することになりました。

【関連年表】

一八四〇年 誕生

一八六八年一月 戊辰戦争が始まる。

一八六九年五月

五稜郭の戦いが終わる。

一八七四年

北海道開拓使の開拓長官となる。

一八八八年

内閣総理大臣となる。

一八八九年

大日本帝国憲法を發布する。

一九〇〇年 死去

清隆は、この日のために姉が真心を込めて縫ってくれた「かすりの着物」を着て堂々と大砲を撃ち、その様子を観ていた人たちからは、「よかにせ、よかにせ」というささやきが沸き起りました。

清隆が二十一歳となっていた一八六二年（文久二年）、※生麦事件が起こります。この時、清隆は薩摩藩の行列に加わっており、血気にはやって刀を抜きかけた者を、「馬鹿なことをするな」と叫んで止めています。しかし、この事件をきっかけに、翌年には※薩英戦争が起こり、薩摩藩はイギリスの優れた技術力の高さを思い知らされました。砲手として戦争に参加していた清隆は、外国とは日本の国力の差を強く感じさせられます。

「世界は広い。外国の産業や軍事技術は、こちらと比べものにな

【よかにせ】  
鹿兒島弁で、ここでは、好青年のこと。

#### 【生麦事件】

一八六二年（文久二年）、生麦村（現在の神奈川県横浜市）付近において、薩摩藩士がイギリス人を殺傷した事件。

#### 【薩英戦争】

横浜の生麦事件が原因で起こった薩摩藩とイギリスの戦争。この戦いを通して薩摩藩の人々は、外国の優れた技術を知ることになる。

らないくらいに進んでいる。」

そうして清隆は、薩摩を出て、江戸で最新の知識を学ぶことを決意しました。江戸へ向けて出発する時、清隆は西郷隆盛から、「大砲を上手に打てる人で終わったらいけない。日本を動かせるような人になりなさい。」という言葉を贈られたといっています。

江戸で江川塾<sup>※</sup>に入門した清隆は、夜眠るのも惜しんで机に向かい、机にもたれながら朝を迎えることもしばしばでした。塾生達と日本の将来<sup>しょうらい</sup>について話し合うだけでは満足できずに、多くの名士<sup>※</sup>を訪ねて議論を繰り返し、やがて清隆の名は、若き志士の中でも、飛び抜けた理論派として知られるようになっていきました。

---

#### 【江川塾】

江戸幕府の役人である江川担庵が開いた塾で、西洋砲術を教えた。

#### 【名士】

世の中に名を知られている人。

薩摩に戻った清隆は、二十四歳の時、外国の船を買おうとしている。藩主に、次のように意見しました。

「船は、いつでも買うことができます。しかし、人を育てるには時間がかかります。まず、船を上手に使える人を育てるために、若者を江戸や長崎だけでなく、外国へ留学させてはいかがでしょうか。」

清隆は、これからの時代に必要なのは、まず人を育てることだと考える人だったのです。この清隆の考えは、その後のエピソードにもよく表れています。

一八六八年（明治元年）九月中旬、日本で新政府の軍隊と旧幕府軍との軍隊が戦った、戊辰戦争の時のことです。清隆が率いる政府軍の一隊は、庄内藩の鶴岡城を攻め落とそうとしていました。

【藩主】  
藩の殿様。

【戊辰戦争】  
一八六八年（慶応四年）から一八六九年（明治二年）に日本でおこった、新しくできた政府の軍隊と旧幕府の軍隊が戦った戦争。

【庄内藩】  
現在の山形県。

そんな中、庄内藩から清隆の所へ使いの者が派遣され、降伏を申し出ます。清隆は、降伏を認める条件として、藩主が自ら政府軍に謝罪することと、持っている武器を引き渡すことを命じました。これに対して庄内藩の使いの者が、

「藩に戻り、相談する時間が必要です。二日間いただきたい。」

と食い下がると、清隆は怒りもせずに、

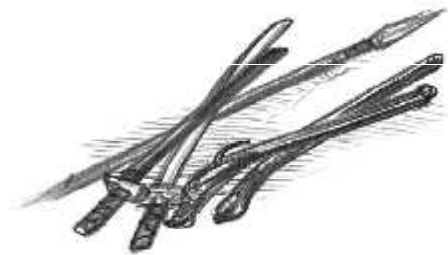
「よいでしょう。それから、話し合いが長くなることもあるので、

さらにもう一日延ばしましょう。その間、私たちは攻撃しないこ

とを約束します。」

と答えました。そしてさらに、

「その約束の証拠として、私があなたといっしょに行き、あなた



【考えてみよう】

あなたなら、清隆のよ  
うに言えるだろうか。

たちの人質ひとじちとなってもよいですよ。」

と、提案ていあんまでしたのです。

使いの者は、清隆の心の大きさに驚おどろき、「その必要はありません。」と伝つたえると、藩へと戻りました。

そして約束の三日後、藩主の酒井忠篤さかいただすみが清隆の元を訪おとずれ、清隆に丁寧ていねいに頭を下くだげ、清隆は約束どおり庄内藩の降伏を認めました。

清隆は無用むような戦いを避さけ、これからの日本のために必要な多くの人たちの命を守ったのです。

また、その戊辰戦争も終わりに近づき、旧幕府軍の残りの武士達ぶしたちが、死を覚悟かくごして※五稜郭ごりょうかくに立てこもっていた時のことです。そこには、清隆もよく知る※榎本武揚えのもとたけあきも含まれていました。

---

#### 【五稜郭】

江戸幕府が蝦夷えぞの箱館はこだて（現在の北海道函館市）に造っていた、星型の城。

日に日に旧幕府軍の敗色はいしよくが濃厚のうこうとなる中、最後の抵抗たいこうを続ける武揚から、清隆のもとへ荷物が届けとどられます。それは、武揚がオランダ留学中に苦心して研究した『万国海律全書ばんこく』でした。武揚は、自分の命よりも、これからの日本に役立つ本が戦争で焼やけてしまうことを避けたかったのです。

この本を受け取った清隆は、「彼かれのような人材じんざいを失うしなうことはできない。」との思いを一層強いっそうくし、何とかして武揚を死なせずに降伏させるため、手を尽つくしました。

まず清隆は、戦いでけがをした者を敵てきも味方あつちも区別くべつすることなく、箱館病院で治療ちりょうさせました。これは、武揚らに、降伏しても命を奪うばわないことを分からせるためでした。また、旧幕府軍の兵士達へいしが安

【榎本武揚】



(国立国会図書館蔵)

【万国海律全書】

海事に関する国際法と外交についての書物。



心して降伏できるように、マグロや酒を送って兵士の心を和らげたり、包囲網の一部をわざと解いて逃げやすくしたりしました。

武揚軍の兵士たちは、マグロや酒をもらい、しかも、けがをした者も手当てをしてもらっていることを知り、徐々に戦う気持ちが変わらいでいきました。そして、そんな清隆の思いを同じように感じていた武揚も、とうとう降伏することを認めたのでした。

武揚は降伏後、戦争の責任を償うために牢屋に入れられました。が、その間、清隆は自分の髪をそり、首から数珠をかけた姿にまでなって、武揚の命を助けるために奔走し、武揚の釈放を勝ち取りました。清隆は、たとえ命をかけて戦った相手であっても、これからの日本にとって大切な人材を、全力で守る人だったのです。

【考えてみよう】

あなたなら、清隆のように行動できるだろうか。

【髪をそった黒田清隆（左）】



（北海道大学附属図書館蔵）

【奔走】

走り回ること。

その後、清隆は新政府の役人となり、※北海道開拓使の開拓長官として北海道の発展の基礎を築くなど、多くの活躍を重ねました。そしてついには、日本で二人目の内閣総理大臣という大役に任ぜられたのです。

しかし、どんなに出世しても清隆は、自分の誕生日には、姉が作ってくれた「かすりの着物」を必ず床の間に飾り、一礼して初心を振り返ったといえます。清隆にとって、鹿児島での懐かしい日々は、いつまでもいつまでも、忘れがたい大切な思い出だったのでしよう。

#### 【北海道開拓使】

明治政府が、北海道の開発を行うために新しく置いた役所。

【開拓使官有物払い下げ事件】

一八八一年（明治十四年）。北海道開拓使が、その工場などを安く売却しようとしたが、世論の反発を受け、これを中止した事件。この事件の後、清隆は開拓長官を辞任した。

